江戸時代中期の地方寺院における築庭工程に関する実証的研究

—山梨県竜王町慈照寺を例に—

A STUDY ON THE MODIFICATION PROCESSES OF JISHO-JI GARDEN IN THE EDO ERA

—Based on the record of rebuilding of the temple—

三浦彩子*

Ayako MIURA

This paper describes the analysis of the *Jisho-ji* garden constructed in the *Genbun*-era (1737-1741) mainly based on the record found in the temple. Following aspects are found through the analysis.

1. The garden construction was done under the direction of the principal gardener named "*Ganji Sudo*."
2. While buildings in the temple were built by the local carpenters, the gardener from *Owari* district was assigned to design the garden.
3. A couple of major temple supporters along with specialists with expertise had participated during schematic phase.

Keywords: Construction of the garden, Yamanashi, Land construction, Edo era, Record of rebuilding of the temple, Timetable, Study on planning method
作庭, 山梨, 敷地造成, 江戸時代, 再建記録, 工程, 設計計画

1 はじめに

有富山慈照寺は、山梨県甲府盆地の北西端にあり、甲州曹洞宗の古刹である。延徳元年（1489）に、武田家の一族である諸角豊後守昌清¹⁾は当地にあった真言宗の廃院を興し²⁾、真翁宗見禅師³⁾を開山に請じ、禅院として再興した。

江戸時代には、中興祖師等⁴⁾により諸堂の再建が推進され、江戸時代の初期と中期の2回にわたる造営事業によって、伽藍が整えられた。この江戸中期の造営については、寺蔵文書『当寺十八世良重代普請之一件』（以下、『普請之一件』と略記）が保管されている。『普請之一件』は、元文2年（1737）から寛保元年（1741）に及ぶ普請記録であり、現存の庫裡、法堂前の石垣、法堂北側の庭園、土蔵の建設等に関する内容を含んでいる。

本論文は、法堂北側にある枯池式枯山水庭園⁵⁾について、『普請之一件』の中から、作庭および関連工事に関する記述を抜き出し、現況との比較を行う。これにより、建築、土木と庭園の造営段階における関連性を実証的に解明するものである。また、庭園作事にかかわった人物を明らかにし、江戸時代中期における造園工事の具体的経緯を明らかにすることを目的とする。さらに、『普請之一件』には造営段階における「庭園計画図」の役割を示す記述が見られたことから、近年の古庭園研究で取り上げられる庭園図（古絵図）につ

いて考察を試みるものである。なお、江戸時代中期の作庭工事については、すでに建長寺の方丈庭園を取り上げ、寺蔵文書に基づきその改築工程を報告したが⁶⁾、本論文では同じ時期に行われた寺院庭園の築庭工程について考察するものである。

2 慈照寺の概要

2.1 慈照寺と従来の研究

慈照寺は、山梨県中巨摩郡竜王町にあり、その北側の台地の南縁に位置している。南面した寺地には、惣門から石段を登って山門があり、正面の一段高いところに法堂が建つ。法堂の北側は傾斜地となり、庭園はそのふもとに位置し、さらに背後の高所には開山堂が建つほか、庫裡、書院、衆寮、鐘樓門等が現存する。

創建以来の寺史と文化財については、すでに柴辻俊六によって『龍王の慈照寺』⁷⁾としてまとめられているが、江戸時代の再建事業に関する記述を要約すると、『江戸時代初期には、中興祖師の十世量岫長応和尚⁸⁾によって、現在の山門、鐘樓門、法堂の再建⁹⁾が実施され、その後、十八世離道良重和尚¹⁰⁾の代に至り、現在の庫裡及び、法堂前の石垣、法堂北側の庭園、土蔵、廻廊等の普請が行われた。これらの伽藍の整備は、江戸時代を通して火災などの大きな災害の記録が見られないことから、老朽化にともなう拡張再建であ

* 独立行政法人国立科学博物館理工学第四研究室
技術補佐員・工修

Assistant Researcher, Dept. of Science & Engineering, National Science Museum,
M. Eng.

ったと捉えられる。これによって、江戸中期に最も伽藍が整えられ、享保9年(1724)には、曹洞宗内での道場の階位である随意会法幢を許された。この時期は、県下における曹洞宗寺院の興盛の時期にも相当しており、慈照寺がその一翼を担っていたと考えられる。』とした見解が示されている。

このほか、慈照寺に関する建築史的研究としては、山梨県教育委員会による現地調査があり、昭和58年(1983)刊行の『山梨県の近世社寺建築』¹¹⁾に、法堂・山門・鐘楼・惣門の調査結果が報告されている。また、法堂と山門は、県指定建造物であり¹²⁾、近年に幾度か修理が行われている¹³⁾。

2.2 慈照寺庭園の概要

慈照寺の庭園は、図-1に断面図を、図-2に周辺地形図を示すように、法堂の北側に位置する斜面の末端部を利用して作庭されている。図-3は、法堂と庭園の平面図を示したもので、庭園様式としては、池泉に水を張らない「枯池式枯山水庭園」と呼ばれる様式のひとつである。池泉の形態は、細長い形をした小池で、池は建物に近接し、対岸の石組みや刈込みを間近に見せた造形であり、江戸時代中期以降の手法¹⁴⁾が見られる。また、斜面の上にある開山堂裏手の墓所内には、茅ヶ岳の噴火時のものといわれる4石の巨石¹⁵⁾が現存し、これは庭園の景にもなっている。他にも、斜面の中腹に大小様々な立石を配しており、傾斜の立地を巧みに生かした独特な景観を形成している。

図-3 慈照寺法堂及び庭園平面図¹⁸⁾

図-1 慈照寺境内の断面(A-A)略図¹⁶⁾

図-2 慈照寺周辺地形図¹⁷⁾

4章に述べるように、法堂背後は、本論文で扱う『普請之一件』の記された江戸時代中期に造成され、同時期に作庭も行われた。先行研究により、境内の現存建物の建築年代は江戸初期から中期とされ、現存する庭園も江戸時代中期の作庭年代と考えられる。

庭園に関する寺蔵史料については、『普請之一件』に記述がある以外には確認されていない。江戸時代の寺領と境内地を示す寺蔵史料に、明治5年(1872)4月に作成された『境内絵図』¹⁹⁾が現存するが、これには庭園は描かれておらず、井戸のような生活水源やいくつかの池²⁰⁾が見られるのみである。こうした境内図(伽藍図)は、主として建物の配置を描く事を目的としており、このため建物以外の庭園は省略されたと推察される。

『普請之一件』には、実際の造庭工事における「庭園計画図」²¹⁾の役割を示す記述が見られるほか、作庭に関わった人物や、同時期に行われた庫裡等の建設経緯やその工匠名が記されている。

本論文では、こうした『普請之一件』の記述に基づき、江戸時代中期の再建事業における作庭作事のあり方について考究する。

図-4 庭園現況(東より見る)

3 江戸時代の慈照寺再興と『普請之一件』

3.1 慈照寺の寺蔵文書

慈照寺は、中世より武田氏や徳川氏との関係が深く²²⁾、寺の由緒を記した多くの古文書を所蔵している。中でも「慈照寺文書」といわれている慶長期（1600 年頃）までの古文書は、山梨県指定有形文化財指定を受けた 16 通が現存する²³⁾。この「慈照寺文書」については、『龍王の慈照寺』にもその全文の写真と解説が掲載されたが、同書によれば、江戸時代以降の近世文書についてはほとんど未調査であるとされる。本論文に取り上げる『普請之一件』は、こうした近世文書のうちのひとつで、江戸中期の再建事業について詳細な記録としては、慈照寺に残る唯一の史料である。

3.2 『普請之一件』の体裁と構成

『普請之一件』は、和紙 37 枚を袋綴じにして冊子にしたもので、表紙に「当寺十八世良重代普請之一件」と記している。頁数一冊、寸法は縦 27.5×横 18.5cm、保存状況は良好である。

奥書の記載事項は以下の通りである。

（奥書）時寛保元辛酉極月吉辰

甲州巨摩郡龍王村 有富山慈照寺十八世 離道良重代記焉

図—5 『普請之一件』表紙（写真提供：柴辻俊六）

『普請之一件』は、次章で詳述するように、元文 2 年（1737）から寛保元年（1741）までの、約 4 年にわたる普請記録である。本書

「当寺十八世良重代普請之一件」

・良重和尚代普請事

— 土蔵

— 仮山之事

・庫裡普請初事

— 庫裡地形土持

— 石樋十四間余

— 井ガタ

— 客殿前石垣

— 客殿前がんぎ

・庫裡之事

・客殿ト庫裡ノ間々廊下入用事

・庫裡普請金子諸色拂方事

・金子^(金) 朱方事

・檀中施主人覚

・材木施主覚

の作者や著述年代については、上記の奥書によって明らかであるが、作者の十八世離道良重和尚は、享保 21 年（1736）から 22 年間に在職し、現在の庫裡および本堂前の石垣、庭園、土蔵や廻廊などの建設を進め、その他、玄関等も整備し伽藍の復興に努めた事が知られている²⁴⁾。

『普請之一件』の構成は左記に示すようで、各項目は、ほぼ年代順に並べられており、「土蔵」と「仮山之事」が一連の普請に先行して行われた経緯が窺われる。これに続く

「庫裡普請初事」には、5 つの小項目として、「庫裡地形土持」にはじまる土木系工事が並べて記されている。この中で「客殿」²⁵⁾と呼ばれる建物については、法堂あるいは書院と思われるが、書院については、『普請之一件』の別の箇所「小方丈建立」の書き出しで始まる記述があるため²⁶⁾、「客殿」は現在の法堂とみてよい。

次の「庫裡之事」には、当普請により再建された庫裡と、その前身の庫裡の両方について、建立年月と工匠名が記されている。また「客殿ト庫裡ノ間々廊下入用事」の内容には、大工作料や材木・釘代の額面が記されている他、馬屋、物置木屋、下浄頭の記述もみられる。なお、「庫裡普請金子諸色拂方事」の概略については、すでに柴辻俊六により『龍王の慈照寺』中で紹介されている²⁷⁾。

『普請之一件』の内容は、全体の約 3 分の 2 を、「檀中施主人覚」や「材木施主覚」といった文書の末尾の項目が占めている。これらは、文書の上段に「一 □□□□」と、一ツ書で寄付（無尽）物を記し、その下段に寄付した人名とその居住地を連記した書き方となっている。

4 『普請之一件』にみる作庭の内容

4.1 作庭の経緯

『普請之一件』の基本的な事項と、各項目の記載順序については、前章で述べたが、このうち庭園について言及している「仮山之事」の部分について原文を取り上げ、活字史料に翻刻するとともに（次頁参照）、これに基づき内容の分析を行う。

『普請之一件』は、表紙を除き紙数 36 丁からなるが、翻刻にあたっては、各紙面の行頭の上に、その丁数と表裏を付記した。なお、原史料の体裁をできるだけとどめるよう、改行は原史料になった。また、行頭に付した史料番号〈L 1～L 24〉は、本文の引用番号と一致する（ただし、本文中に引用した順序は、本表の番号順とは限らない）。その他については、凡例²⁸⁾に従い翻刻を行った。原文中の地名・人名については、本文に下線と番号を付し適宜補注した。

作事の発端と経緯については、L 2～L 5 によって明らかである。これによれば、背後の山裾は客殿（法堂）の雨落まで達し、このため洪水時の増加水量が、法堂の床下まで溜まる水害を受け、排水のため背後の山を切取ることになったと理解される。この造成工事とともない作庭が企てられ、元文 2 年（1737）4 月 10 日に、傳右工門殿、六良右工門殿、数馬殿といった 3 人の人物による相談の結果、尾張国の庭師・須頭元二に作庭が依頼され、その直後の 4 月 18 日には、着工となった経緯が記されている（L 9～L 12）。

L 23～L 24 は、決算にまつわる記述とみられ、「仮山諸事仕拂金」として甲金五両、および庭師等への謝礼が記載されている。これによって作庭工事が終わったことを示しているが、具体的な工事期間については、以上の原文からは明らかでない。一方、「庫裡普請初事」の項目中の原文を参考にすると、元文 5 年（1740）の正月に庫裡地行普請に着手した経緯が記されており³⁵⁾、これにより、庭の普請はそれ以前に完了していたと考えられる。

これらの記述から、作庭工事は元文 2 年（1737）4 月 18 日に着工し、元文 5 年（1740）の正月に入るまでの、約 2 年半の期間に行われたものと推察される。法堂北側一帯は、この普請にともなって大きく地形が改変され、新しく造成された背後の山畔を利用して、庭園が作られた。

4.3 関連職人とその出自について

L10～L11の庭師「須頭元二」の名は初出であり、その活動領域や略歴については不明であるが、『普請之一件』には、庭師以外にも、これらの普請にかかわった工匠名として、「石屋偕五郎」や「大工重左工門」等の名前が記載されている。このように、庭の工事区分の中に、石屋や大工の名前がみられたことは、これらの職能が作庭に何らかの関与を有していたことを裏付けるものである。

庭園作事に引き続いて行われた庫裡の再建については、『普請之一件』中に、工匠名と所在地名が「古府中深沢助右衛門」と記載されている⁴¹⁾（「古府中」とは現在の甲府市内にあたる地名）。これに対して、「石屋偕五郎」や「大工重左工門」には、地名を併記していないことから、在方の職人であったと推察される。

ここで、当時の建築事情についてみると、先に挙げた『山梨の近世社寺建築』には、「江戸時代中期以降になると、商品流通が盛んになり、富士山詣・身延参拝などの民衆の社寺詣も盛んになってくる。江戸文化の流入も顕著になってくるが、甲府とその周辺、郡内、身延に江戸の影響が強く見出せる。」と述べられている⁴²⁾。慈照寺の庫裡の工匠の所在地名が古府中であることから、江戸の影響を受けたと考えられるが、一方で当時の江戸は、大名庭園の隆盛期を迎えており、元禄期（1688～1704）に造られた尾張藩の下屋敷・戸山荘はとくに広大な庭園を誇るものであった⁴³⁾。当時の江戸には、多くの庭師が存在したことが想像されるが、江戸からではなく遠く尾張国から庭師を呼んだ背景については明らかでない。

4.4 「畫圖」の役割について

仮山の見立ての段階で製作された「畫圖」とは、おそらく「庭園計画図」のような、建築平面図に庭園の姿図を加えた絵図であったと推測される。先の 4.1 項に述べた作庭の経緯において、庭師への依頼から着手までの日数がわずか 8 日と短期間であったのは、この絵図が庭師との交渉にも使われたためであると考えられる。即ち、完成予想図のような「畫圖」が事前に存在していたことにより、現場での指示効率が上がり、専門の職人によって即座に実行に移されたのではないかと考えられる。

森蘊の研究によれば、「日本庭園を造るのに設計図を書いたかどうかについては、現在のように科学的な図法のものに残されていないが、もっぱら現場で指導に当たって、設計作図以上の効果をあげることができた。」と指摘されている⁴⁴⁾。また、具体的に庭園の仕上りの姿を示した実例としては、保延元年（1135）鳥羽殿勝光院築造に当り、源師時という人が池の絵様を作り、鳥羽上皇に見せたというのが最古の例とされる。室町時代に入ると、造庭工事は頻繁に行われるようになり、社寺宮苑の真景図というようなものが盛に書かれはじめていた⁴⁵⁾。このような庭園入りの絵図は、熟練した絵師によって作図され、依頼者に見せたものであると述べている。

『普請之一件』に「家石殿同道ニテ畫圖等ヲイタシ」と記された「家石殿」については、どのような肩書きの人物であったのかは不明であるが、以上のことから、おそらく絵師をなりわいとした人物であったと推察される。

5 まとめ

以上の『普請之一件』の分析によって、慈照寺に現存する法堂庭園について、元文 2 年（1737）に行われた庭園作事の内容が明らか

になった。

『普請之一件』には、庭師「尾張国須頭元二」やその他の関連職人の名前以外にも、庭園作事にかかわった名主の名前や、作事の経緯が具体的に記載されている。これにより、庭師によって作庭が実行される前段階において、十八世離道良重和尚や名主等によって庭園の見立てが行われ、また、これに基づき「畫圖」が製作されたという経緯が明らかになった。さらに、この「畫圖」については、絵師（家石殿）による作図であり、その性質は「庭園計画図」に類するものであったと推測される。

本論文では、『普請之一件』の原文から、「仮山之事」の項目について取り上げ、翻刻を行い、作庭に関する考察を行った。史料の全文については別途紹介し、その他の境内普請についても取り上げる予定である。中でも、排水路の敷設といった作庭に関連する土木系工事の全容を明らかとし、近世の庭園生産の具体について、さらに考察を行いたい。

以上をまとめとするが、同時期の建築普請が近在の大工によって行われていたことに対して、作庭を尾張国の庭師に依頼したことについて疑問が残る。甲州庭園には、京都嵯峨流の造園法のものが多く確認されているが、この理由については、甲信地方は室町時代から京都鎌倉の禅僧が多く入って来たためであり、江戸時代に至ってもなお京都流が継承されてきたと考えられている⁴⁶⁾。従って、京都で発達した庭園築造法が信州・甲州へ伝えられる過程において、尾張の庭師を起用したという慈照寺庭園の事例は、甲州庭園史上において新たな史実である。尾張国のような江戸と上方の中間的地域における作庭技術の普及については、今後の比較研究による考察課題とした。

本研究をまとめるにあたり、工学院大学後藤治助教授、国立科学博物館理工学研究部清水慶一室長、(社)海外鉄道技術協力協会小野田滋氏より御教示を賜りました。原本の閲覧に際して、慈照寺大森道雄住職の御配慮を賜りました。また、早稲田大学中央図書館特別資料室の柴辻俊六氏より、文書の解説を含めて、多くの御教示を賜りました。竜王町教育委員会の皆川洋氏より関連資料を御提供いただきました。以上の方々に厚く御礼申し上げます。

なお、本研究は、平成 14 年度笹川科学研究（一般科学研究、複合領域）による研究成果の一部であり、併せて謝意を表します。

【本文註】

- 文献 2,p.420 によれば、開基名については、開山堂内に安置された位牌銘に「当山開基慈照寺殿肯從五位豊州大守賢昌良清大禪定門祇、武田刑部大輔信昌六男諸角豊後守昌清現住武田信玄公幕下属永禄四西九月十日作州川中島戦死」とある事に基づく。また、文献 8,p.13 によれば、開基については明治 28 年作製の寺伝「由緒書及財産調書」が唯一の記録であり、その他、諸角氏に関する文書や記録はほとんど残っていないとされる。
- 文献 8,p.9 の「すでにそれ以前に同じ所に旧寺小庵のあったことが古い記録にみえている。その古寺は真言宗派で法城寺とっていたようであるが、すでにその当時には無住状態であったという」に基づく。
- 文献 8,p.10 によれば、禅師は武蔵国足立郡の生まれで、岡部氏一族の人である。龍華院の桂節和尚に弟子入りし、師の没後に壇徒の要請に応じて竜王へ移り、慈照寺の開山となった。永正 13 年（1516）没。在職年数 27 年。
- 諸堂の建設経緯の概略については、文献 8 によれば、開山の真翁宗見禅師（遷化・永正 13 年（1516））の 27 年に及ぶ在任の期間に、ほぼ寺院としての基礎が固められ、三世助山宗佐和尚（遷化・永禄 1 年（1558））の代に至って、その規模が確定したとされる。また、寛永 9 年（1632）に入寺した十世量軸長応和尚は、法堂再建、および、山門や鐘樓の建設を推進し、中興祖師とされる。
- 本庭は、昭和 58 年 5 月 6 日に竜王町指定文化財（名勝）に指定された。その際の指定書によれば、地積は（東西 29m、南北 20m）約 700 m²、南北斜面 30 度、池約 30 m²である。また、枯池式枯山水とは、水を用いない

で池泉庭園に近い枯池造ったものをいう。

- 6) 文献 18。
- 7) 文献 8。
- 8) 正保 3 年(1646)6 月 8 日の入寂までの 14 年間在住。その他、十世長応和尚が中興祖師といわれるゆえんを示すものとして、「過去帳」の整備が挙げられる。
- 9) 寺伝『由緒及財産調書』によれば、現在の法堂は慶安年間(1648－1651)の建立で、正確には没後 2 年余の十一世翁関利和尚(遷化・承応 3 年(1654))の代に成就しているが、その他の諸堂の建設と同一計画に含まれる一大復興事業の一部とみられる。
- 10) 寛延 2 年(1749)9 月 12 日の入寂までの 22 年間在住。
- 11) 文献 9。
- 12) 法堂は昭和 40 年 5 月、山門は昭和 33 年 6 月に県指定有形文化財指定を受けている。
- 13) 昭和 42 年(1967)に、県の補助事業として法堂屋根の茅葺を鉄板に替える工事が行われたが、近年、(財)文化財建造物保存技術協会の建造物修理設計監理受託事業として、平成 6 年度(1994)に屋根銅板の葺替えが行われている。工事期間は、平成 6 年 6 月 1 日から 11 月 30 日までの 6 ヶ月間。工事の内容は、屋根葺替え(鉄板を銅板へ)、および、軒反の線の修復、その他、縁廻りなどの腐っている箇所(の修復が行われた。
- 14) 文献 15,p.101 によれば、江戸時代初期の池は、大名庭園に限らず寺院庭園でも、奥行き(の広い大きな池が造られたが、中期以降は、小池が多く、形は凹字形か細長いものが多くなったとしており、これは座視鑑賞様式の度が強くなったためであるとしている。
- 15) 一説には、一帯の古くからの地名「四ッ岩」とも関係があるとされる。
- 16) 実測調査に基づき、筆者作成。
- 17) 国土基本図(1/2,500 縮尺、Ⅷ-E 20-1、平成 8 年測量)に基づき、筆者加筆。
- 18) 竜王町教育委員会提供の実測図面に基づき、筆者加筆。
- 19) 絵図によれば、現存建物(の他、江湖寮、禅堂、土蔵、新小屋、浴室も描かれている。山門に始まる「廻廊」は、これらの堂宇を連ねて、長く後方の本堂(現法堂に相当)まで達している。本堂の向かって右には「庫裡」(書院)、左には「衆寮」「禅堂」、また本堂の背後に「開山堂」、庫裡の背後に「新小屋」、書院の背後に「宝蔵」「土蔵」が見られ、かつ鐘楼門の右には「浴室」が描かれる。明治 10 年(1877)に内務省に規模縮小願を出し、江湖寮等、一部の堂宇や廻廊が取り壊され、これにより、ほぼ現状のような規模に縮小された。こうして失われた建物も絵図により確認される。
- 20) 山門前に現存する自然風の護岸池の他、廻廊で囲われた内苑に 2 箇所の整形池が描かれている。また庫裡裏の新小屋上部にも、井戸を示す「井」の字が記入された整形池がみられる。
- 21) 庭園については「庭園計画図」「庭園平面図」など、直接庭園を描いた庭園図が作成されることがあり、その種類や用途については吉河功により報告されている(文献 17)。「庭園計画図」については、森蔵により、江戸時代に小堀遠州によって行われた多くの庭園作事では、建築平面図に実測値を基とした庭園の平面図や姿図を加味した「庭園計画図」が用いられていた、と指摘されており(文献 11,p.67)、また「庭園平面図」については、江戸時代(の大名庭園を対象とした研究がある(例えば、文献 7)。
- 22) 文献 4,p.25 によれば、慈照寺二世の天桂禅長は、やがて信虎の開基となる甲府大泉寺の開山となった。この関係から、武田信玄・勝頼父子も本寺を保護した。また、文献 8,p.14 によれば、実際に深くかわってくるのは、晴信(信玄)の父信虎の頃からのようである。
- 23) 文献 4,p.25 によれば、寄進状・赦免状・安堵状・禁制等によって武田氏との関係が証される。次いで織田・徳川・浅野各支配文書があり、すべて 16 通が保存されており、甲斐の中世史の微証として貴重であるとして、昭和 44 年 11 月 20 日に山梨県指定有形文化財の指定を受けた。「慈照寺文書」については、江戸中期の元文 4 年(1739)に幕府書物方奉行に属する青木昆陽が調査をしており、その結果は、現在、国立公文書館内閣文庫に「諸州古文書甲州」とした影写本が残っている。近代になっては、東京大学史料編纂所による調査が行われ、同所に写真版で所蔵されている。
- 24) 文献 8,p.70。
- 25) 文献 13,p.9 によれば、「文献上禅宗寺院において客殿の語は中世から出現している。(中略)記録上では、『蔭涼軒日録』の寛正 4 年(1463)8 月 13 日条に「蔭涼客殿」とみえ、以降相国寺塔頭中の施設として客殿なるものがしばしば現れている。『蔭涼軒日録』で方丈と呼ぶのは本寺の建物であり、塔頭の中心建物は一般には「本坊」「本房」「御坊」と呼ばれている。おそらく、この本坊の中の主室が客殿とされ、それがやがて本坊そのものの名称に転じたものらしい。」とあり、塔頭の中心建物を客殿と呼ぶことが知られる。
- 26) 原文の「客殿、庫裡、間、廊下入用事」の項目中に、「小方丈建立、棚柱二間、五十角二十丁(以下略)」とする記述がみられる。
- 27) 同書は、本史料の評価を「庫裡の造営の総費用である甲金 169 両余は、その調達を檀中無尽金、寺壇御見舞、施主金、方丈繰入金、飯料理金、借用金等で賄われた」と述べている。さらに、「無尽構の参加者居住地や氏名、施主者の人名などが詳細に記録されており、当時の物価や檀徒の分布を知る上で、有力な手がかりとなる」としている。
- 28) 漢字は、常用漢字を用い、旧字体・異字体は新字体に改める事を原則とした。変体仮名は、而(て)、之(の)を除き、現行の平仮名・片仮名に改めた。また、合字の ヱ(より)はそのままとした。本文中に適宜、独点(.)・中黒(・)を付した。原史料の欠損等により翻刻が不可能な文字については、□等で示した。
- 29) 文献 5,p.158 によれば、その家系は歴代三役第 15 代小宮山信三につながる。
- 30) 『普請之一件』には、幾度が同名の記載が確認される。
- 31) 文献 5,p.979。
- 32) 文献 11、および文献 6,p.103、文献 8,p.59。
- 33) 慈照寺住職のお話によれば、その子孫が現在も、花輪または新海の姓で、西八幡の旧家として続いているとされる。
- 34) 文献 8,p.21。

- 35) 「庫裡普請初事」の項目にある原文、「元文五申ノ正月ヨリ二月下旬迄二地行普請仕り」に基づく。
- 36) 文献 14,p.160 による。さらに、文献 18 により、『龍王殿再建日記』においても、このような「築山」の用法が確認されている。
- 37) 文献 5,p.61 によれば、名主とは「村の長であり、今の町村長に当るが、誠に大きな権力をもっていた。支配地区内の治安を図り、農商業を勧め、道路河川等の土木事業から、(中略)養子縁組などにも立入って、監督指導の責任をもっていた。」とされる。
- 38) 文献 5,p.62 によれば、長百姓とは「名主を助けて村の事務を行う役で、今の助役、収入役、書記のような仕事をした。」とされる。
- 39) 文献 5,p.60 によれば、「本町の記録にはすでに慶長 9 年(1604)に、この名称が見える」とする記述に基づく。
- 40) 文献 5,p.144。
- 41) 『普請之一件』の「庫裡之事」の項目中、棟札の日付「元文 5 年(1740)2 月 24 日」と工匠名が記載されている。
- 42) 文献 9,p.15。
- 43) 文献 16,p.19 によれば、「尾張徳川家の二代光友の時代には、尾張藩江戸屋敷は市ヶ谷に上屋敷、麴町・四ッ谷・麻布などに中屋敷、戸山に広大な下屋敷、築地に蔵屋敷が建築・整備された。戸山屋敷には広大な庭園があり、その中に種々の町屋 37 軒の虚構の宿場町も作られ、將軍御成や藩主滞在の時には、それぞれ店を開いて売買の様子を面白く見せる趣向を行った。」とある。
- 44) 文献 11,p.67。
- 45) 例えば、「等持院境内図」「東山殿林泉図」などが知られる。
- 46) 文献 1,p.11 によれば、「甲信地方は室町時代から京都鎌倉の禅僧が這入り込んでくる。さうすれば此の地方に京都流の造園法が伝えられたことは推測し得べく、その後、江戸時代に至てもなほ右の如き京都流の造園法が喜ばれ、それが相継承して近頃までこの地方に京都流庭園の行はるゝのであらうと思われる。」とされる。

【参考文献】

- 1) 龍井松之助：庭園 甲府號 第 3 巻 第 8 號、庭園協会、1921.8
- 2) 龍王村：龍王村史、龍王村役場、1955.3
- 3) 太田亮：姓氏家系大辞典 第二巻、角川書店、1963
- 4) 山梨県教育委員会：山梨県の文化財、1970.3
- 5) 龍王町：龍王町史、龍王町役場、1976.9
- 6) 島崎博則：山梨県市町村誌、歴史図書社、1977.3
- 7) 北野隆他：水前寺庭園の歴史的研究、造園雑誌 41 (3)、pp.2～13、1978
- 8) 柴辻俊六：龍王の慈照寺、斎藤興業、1979
- 9) 山梨県教育委員会：山梨県の近世社寺建築、1983.3
- 10) 山梨県教育委員会：県指定山梨県の文化財 改訂第 4 集、1983.3
- 11) 森蔵：庭園 日本史小百科 19、近藤出版社、1984
- 12) 竜王町教育委員会：竜王町の文化財、竜王町立図書館、1990.3
- 13) 財団法人文化財建造物保存技術協会：文建協通信 No.11、1995.1
- 14) 日本庭園研究会：庭園・植栽用語辞典、井上書院、2000
- 15) 吉田徳治：古庭園の鑑賞と作庭方法、農業図書、2000
- 16) 岸野俊彦：尾張藩社会の総合研究、清文堂出版、2001.3
- 17) 日本庭園研究会：庭園図(古絵図)についての基本知識、庭研 第 340 号、pp.100～102、2002.7
- 18) 三浦彩子：建長寺蔵「龍王殿再建日記」に見る江戸期作庭の実証的研究、日本建築学会計画系論文集 No.559、pp.263～268、2002.9

(2002 年 9 月 10 日原稿受理、2002 年 12 月 27 日採用決定)